

ムンダ語の感情語*

長田俊樹

総合地球環境学研究所

1 はじめに

インド東部のジャールカンド州を中心に分布するムンダ語 (Mundari) には、豊富な感情語がみられる。小論はその感情語についての考察である。感情語とは何か。この術語は英語の Expressive の訳語で、じゅうらい、擬音語、擬態語、あるいはオノマトペといわれてきたものに、ほぼ対応する。では、なぜオノマトペといわないで、感情語という術語を使用するのか。それは、この術語が南アジア (インド) 言語領域論 (South Asian (Indian) Linguistic Area) やオーストロアジア語族研究において、一つの学術用語として確立しているからだ。そこで、ムンダ語の感情語の分析にはいるまえに、オーストロアジア語族研究やインド言語領域論における感情語についての研究をみておきたい。

まず最初にインド言語領域論について述べる。インド言語領域論はエメノーによる "India as a linguistic area" という論文をもって嚆矢とする。エメノーによると、言語領域とは以下のように定義される。

‘an area which includes languages belong to more than one family but showing traits in common which are found not to belong to the other members of (at least) one of the Families’ (Emeneau 1980:124)

関係代名詞が二つもあり、ずいぶん回り持った表現である。いくつかの訳はあるが、定訳はない。また、正直言って、いくつかの訳をみてもうまく訳しているようには思えない。とくに、最後の ‘the other members of (at least) one of the Families’ が問題で、たぶんインド・ヨーロッパ語族のうち、インド・アーリア語族だけが持っている特徴だけを意識しているから、こんな表現になるのだろう。

そこで、思い切ってこうしておく。換言していえば、ある地域において、ことなった語族に属する諸言語が共通の特徴をもつようになる地域を言語領域とよぶ。よく知られたことだが、インドには、インド・アーリア語族、ドラヴィダ語族、ムンダ語族の三語族¹が

*小論は科学研究費基盤研究 (C) No. 18520345 2006-2008 『ムンダ語感情語の研究とデータベースの構築』による研究成果の一部である。また、小論の一部は英語論文として、2007年11月にインド、プーネで行われた国際オーストロアジア言語学会で発表し、その要旨はアブストラクト集に掲載されている。さらに、その英語論文は2008年に出版された Gregory D.S. Anderson (ed.) *Munda languages*. Routledge に掲載された ‘Mundari’ の一部とも重複する。これら英語論文執筆にあたってはグレゴリー・アンダーソン、ニコラス・エヴァンスから貴重なコメントをいただいた。名をあげて謝意を表したい。小論はこの英語論文に基づいて改稿されている。もともとは国際オーストロアジア語族学会での発表だったため、オーストロアジア諸語への言及に限定していたが、小論では南アジア諸言語や日本語の例を追加している。なお、小論の一切の文責は言うまでもなく長田にある。

¹チベット・ビルマ諸語をくわえて四語族という場合や、さらにアンダマン諸語や孤立語とされるブルシャスキー語なども言語領域を形成すると考える場合もある。しかし、小論はエメノーにしたがって、インド言語領域論の対象を三語族だけに限って議論を進める。

おもに分布し、それらことなる語族に属する諸言語が同じ地域に長期にわたって共存してきたために、共通の特徴をもつにいたる。それがインド言語領域なのである²。

エメノーはこの論文のなかで、共通の特徴、つまり地域特性をいくつかあげている。そのうちのひとつに *echo word*³ がある。インド言語領域論においては、*echo word* は以下のように定義されている。

‘It is generally a construction in which basic word formulated as CVX is followed by an echo-word in which CV is replaced by a morpheme *gi-* or *u-* or the like (or C is replaced by *m-* or the like), and X echoes the X (or VX echoes the VX) of the basic word. The meaning of the echo word is “and the like”;
(Emeneau 1980:114)

この *echo word* はドラヴィダ語やインド・アリア語ではかなりはっきりとした特徴を持つ⁴。たとえば、ドラヴィダ諸語では、タミル語 *puli* 「虎」がエコー形式をとると、*puli kili* で、意味は「虎と虎に類するもの」となり、カンナダ語 *marā* 「猫」 *marā gira* 「猫と猫類」となる。インド・アリア諸語では、ヒンディー語 *phul* 「花」 *phul val* 「花と花類」、ベンガル語 *bari* 「家」 *bari ṭari* 「家と家類」などがあげられる。ムンダ語にも同様の形式はみられるが、こうした形式が必ずしも「～とそれに類するもの」という意味を持たない⁵。むしろ、これらの形式も意味的には、後に述べる感情語であるケースが一般的である。

エメノーはこの *echo word* 以外にも、*onomatopoeics*⁶ という題で論文を発表し、インド・アリア諸語とドラヴィダ諸語の *onomatopoeics* が、やはりインド言語領域の地域特性として、共通である例をあげている。ここであげられている *onomatopoeics* とは、完全重複形や一部重複形をもった擬態語、擬音語である。ところが、エメノーはインド言語領域論に関する論文集を刊行する際に、自著の解説を含む序文を寄せ、こうした術語を整理統一することをめざして、つぎのように *Expressive* という術語であらわすことを提唱している。

‘I would be now, following Diffloth (1976b: 263-64), use his terminology: ‘expressive’ is the most inclusive term for a form class with semantic symbolism and distinct morposyntactic properties; ‘ideophones’ are a subclass in which the

²インドに限らず、言語領域の定義や事例をめぐる議論が21世紀になった現在でも活発である。たとえば、Matras et. al (eds.) (2006) とくに Campbell (2006), Urban (2007), Muysken (ed.) (2008)などを参照。

³この *echo word* は「畳語」と訳されることがある。しかし、国語学においては、畳語と言えば「山々、青々」といった重複形をさし、ここでの意味とはことなる。したがって、訳語として適当とはいえない。ここではエコー形式語という訳語をあえておこうが、それを定訳として提唱する意図は全くない。適訳があればぜひご教示願いたい。

⁴それぞれの言語における *echo word* の詳細については以下の文献を参照のこと。ドラヴィダ諸語では、タミル語は Gnanasundaram (1972), Arunachalam (1977), Kothandaraman (1983), Wiltshire (1999), Keane (2001)、テルグ語は Bhaskararao (1977: 6)、カンナダ語は Murthy (1975), Sridhar (1990), Lids (2001)、トダ語は Emeneau (1938), Gordon (1989)、コラミ語は Emeneau (1955: 101-2)、そしてインド・アリア語については、マラーティー語は Apte (1968)、ベンガル語は Fitzgerald-Cole (1996)、アワディー語は Saksena (1937)、シンハラ語は Hettiaratchi (1959)、ヒンディー語は Singh (1969), Abbi (1992a) など。

⁵そういう例が全くないわけではない。たとえば、*aṛandi* 「結婚(式)」 *aṛandi koṛandi* 「結婚とそれに付随するもの」。しかし、こうした例は非常に少ない。つまり、ムンダ語においては、こうしたエコー形式が基底となる最初の二音節だけでは意味を持たない場合が多い。

⁶このエメノーのあげた共通の *onomatopoeics* について、筆者はチョーターナグプル地方ではなされているインド・アリア語族のナグプリ語、パンチバルガニア語などや、ドラヴィダ語族のクルク語、ムンダ語族のサンタル語、ムンダ語、ホー語などから、実例をあげて、検証したことがある (Osada 1991, 長田 1990)。

symbolism is phonological; ‘onomatopoeics’ are ideophones in which the reference of the symbolism is acoustic (i.e. imitative of sounds). Since the ideophones may have reference not only to sounds, but to any other objects of sense, including internal feelings as well as external perceptions (sight, taste, smell, etc.), and since the Indo-Aryan/ Dravidian items already examined have this very wide type of reference, the broadest term ‘expressives’ seems appropriate.’ (Emeneau 1980:7)

この Expressive という用語を定義するのにディフロースが登場する。

ディフロースは長くオーストロアジア語族の比較言語学研究を行ってきた言語学者である。70才になった現在もインドのカシ語などの調査を行なっているし、フィールド調査によって集められたデータはデータベース化されており、近いうちには出版されるはずである⁷。しかし、ディフロースの博士論文はドラヴィダ語族のイルラ語の文法 (Diffloth 1968) である。ご本人によると、その南インドでの体験から、ドラヴィダ語族に豊富にみられる Expressive に興味をいだいたのだという。そのディフロースによる Expressive の定義は以下の通りである。

‘onomatopoeic forms are those displaying acoustic symbolism and having syntactic and morphological properties totally different from those of verbs and nouns. Ideophone are words displaying phonological symbolism of any kind (acoustic, articulatory, structural) and having distinct morpho-syntactic properties; ideophones include onomatopoeic forms as a subclass. Expressive have the same morpho-syntactic properties as ideophones, but their symbolism, if such exists, is not necessarily phonological; expressive contains ideophones as a subclass.’ (Gérard Diffloth 1976b: 263-264)

この定義は第1回国際オーストロアジア語族言語学会の研究発表をまとめた論文集に掲載されたディフロースの論文から引用したものである。それ以来、オーストロアジア語族の感情語について、多くの研究が行われてきた⁸。ここで、このディフロースの定義とエメノーの定義とをくらべてみてほしい。エメノーはほとんどディフロースの定義にしたがっていることがよくわかるはずである。じつは、ディフロースはエメノーの弟子ウィリアム・ブライトの弟子で、孫弟子にあたる。ここに一見何の関連もないと思われる、インド言語領域論とオーストロアジア語族研究が Expressive をキーワードとして結びついていることに気づくはずである。そういう意味において、インド言語領域をなし、オーストロアジア語族に属するムンダ語の Expressive を研究することは非常に意義深い。

すでに述べたように、小論では Expressive の訳語として感情語⁹ という用語を使用する。小論の中心はムンダ語感情語の (1) 形態論的分析、(2) 統語論的分析、(3) 意味論的

⁷もし、ご本人がなくなったり、病気で研究が続けられなくなった際には、筆者がいまのデータベースに基づいて出版のお手伝いすることをお約束している。これを単なる口約束としないためにここに明記しておく。

⁸たとえば、ジャー・ハト (Jah Hut) 語やセマイ語、スーリン・カンボジア語に関するディフロースの論文 (Diffloth 1976a, 1976b, 2002) やセマイ語に関するヘンドリックの論文 (Hendricks 2001)、ソー (ブル語) に関するミグリアツァの論文 (Migliazza 2005)、そしてモン語とクメール語に関するディカーニオの論文 (DiCanio 2005) などはいずれも感情語に関する研究論文である。また、文法書の一部にも感情語が言及されることが多く、テミアル語のベンジャミン (Benjamin 1976:177-178)、セメライ語のクルスペ (Kruspe 2004)、ジャハイ語のブレンハルト (Burenhult 2002:162-164) カム語のスヴァンテッソン (Svantesson 1983:115-125) らの文法書には、いずれも感情語の記述がみられる。これらは全てディフロースの記述から出発している。

⁹日本語のオノマトペを Expressive としてタミル語との対照研究を行った研究 (Gasser, Sethuraman and Hockema

分析、(4) 音象徴的分析である。それぞれについて、将来的には南アジアの諸言語やオーストロアジア諸語との比較対照研究を行う予定である。また、日本語で書くことを意識すれば、当然ながら日本語のオノマトペとの対照も行われるべきである。しかし、小論は急遽まとめることとしたために、これらの言語データへの言及は非常に限定的であることをお断りしておく。これらは今後の課題とする。

2 ムンダ語感情語の形態論的分析

ムンダ語感情語は形式から次の三つに大別できる。

- (A) 完全重複形
- (B) 一部重複形（エコー形）¹⁰
- (C) 母音交替形

では、それぞれについてみていこう。

- (A) 完全重複形

ムンダ語には動詞に完全重複形がみられる¹¹。しかし、この感情語の重複形は動詞とはまったくことなる。つまり、重複しない基本形では意味をなさない。つまり、重複されてはじめて感情語として意味を持つ。こうした例をあげよう。

感情語	意味
<i>suyuni suyuni</i>	「やせて背の低い人、あるいはそういった状態」
<i>kase kase</i>	「疑いのまなざしで、じろじろと見る」
<i>mondor mondor</i>	「ツーンと臭う酒」
<i>mogo mogo</i>	「花のいい香りがただよう様」
<i>kata kata</i>	「げらげら笑う」

こうした完全重複形の感情語はかなり広い分布を示す。南アジア諸語に限っても、インド・アリア諸語、ドラヴィダ諸語、ムンダ諸語、チベット・ビルマ諸語、いずれ

2005) はある。また、Expressive Japanese という題の本 (Maynard 2005) があるが、これは感情を表現する日本語という意味で、オノマトペだけをさしているのではない。日本語に関連した英語の Expressive の用法を網羅的に調べたわけではないので、一部には小論であげた感情語と同じ用法が使われていることだけを指摘しておくにとどめる。一方、日本においては、オノマトペなどを感情語という用語でまとめることは、筆者の知る範囲ではこれまでない。感情語とは心理学や教育学の分野ではしばしば使われていて、感情を表す語彙をさすのが一般的であり、論文などの英文タイトルをみると Emotional word とか Affective word とかに英訳されている。筆者は専門がちがうため、これら用語法がどこまで汎用性があるのかわからない。筆者はエコー形式語と同様、感情語という用語に拘泥する気はさらさらなく、この小論ではとりあえず感情語を使用する。

¹⁰ なお、ムンダ語では形式としてはエコー形式であられる単語も意味的には感情語とみなすことができる。形態論的分析にあたっては形式だけから echo word との混同がみられるのではないかと思われるかもしれないが、あくまでも意味としては「～とそれに類するもの」とことなる以上、echo word とはみなさないで、感情語 (Expressive) とみなす。

¹¹ 6. で指摘するように、ムンダ語概説書 (Anderson ed. 2008) ではこうした動詞の重複形も感情語としてあつかわれている。Abbi (1992a) もまた同様に動詞重複形と感情語の混同がみられる。

の語族に属する言語でもみられる¹²。

一方、オーストロアジア語族の感情語ではこうした完全重複形よりも、もっと複雑な接中辞や接頭辞を使った形式がみられる (Diffloth 1976b)。今後こうした比較研究を行う必要がある。

(B) 一部重複形

一部重複形とは最初にあらわれる基本形の語頭子音がエコー部分で交替する場合である。交替する語頭子音としては *p, b, m, k, g, c, j, d, t, s, r* で、これはエメノーがあげたエコー形式語と同じ形式である。とくに、語頭子音 *m* はエメノーが例としてあげている。エコー形式の語頭子音として、ヒンディー語の *v* やベンガル語の *t̪* はここではあらわれない。エコー形式語は最初の基本形が普通の単語であって、エコー形式を付加することで、「～とそれに類するもの」という意味をなす。それがエコー形式語である。したがって、「～とそれに類するもの」の意味を持たないムンダ語の場合はすべて感情語とみなす。なお、下にあげた例でも、最初の基本形が意味を持つ場合がある。その場合は指摘しておく。

この一部重複形のうち、下にあげた (i), (ii), (iii) つまりエコー部分の語頭子音が *p, b, m* であるケースが多い。

(i) CVX pVX

感情語	意味
<i>riti piti</i>	「タマリンドのように、プチプチと小さい葉がはえている様子」
<i>risuri pisuri</i>	「歯を何度も出して、笑う様」
<i>laṭa paṭa</i>	「カレーなどが粘りけのある状態」
<i>laṭar paṭar</i>	「本当なのかどうか、何を信じればいいのか、といった様子」
<i>leden peden</i>	「太りすぎて歩きづらい様子」

(ii) CVX bVX

感情語	意味
<i>kau bau</i>	「ぶんぶんして、他人が気に入らないように振る舞うこと」
<i>kered bered</i>	「反抗的な性格」
<i>cere bere</i>	「ピーチクパーチクと鳥がさえざる様」
<i>ladi badi</i>	「ぐちゃぐちゃに、物が散乱する様」
<i>sador bador</i>	「がつがつと食べる様」

¹²エメノーはインド・アリア諸語とドラヴィダ諸語のオノマトペを比較している (Emeneau 1980:269-289) が、この中には完全重複形が多くみられる。また、アッピ (Abbi 1992a:16-18) は南アジア諸語の感情語という節をたてて、インド・アリア諸語のヒンディー語、ネパール語、ベンガル語、ドラヴィダ諸語のタミル語、チベット・ビルマ諸語のメイタイ語、ミズ語の例 (雨音や笑い声の擬音語、臭いの擬態語など) をあげている。とくに、ムンダ諸語についてのべておく。最近出版されたムンダ諸語の概説書 (Anderson ed. 2008) によると、サンタル語 (Ghosh 2008:73)、ホー語 (Anderson, Osada and Harrison 2008:231)、ソーラ語 (Anderson and Harisson 2008a:360) には完全重複形の感情語がみられるが、カリヤ語 (Peterson 2008:482-3)、ゴルム語 (Anderson and Rau 2008:413)、レモ語 (Anderson and Harisson 2008b:607)、グトブ語 (Griffith 2008:665)、グタ語 (Anderson 2008:741) などでは完全重複形の感情語はみられない。後述する一部重複 (エコー形式) 形や母音交替形の方がもっと一般的である。

(iii) CVX mVX

感情語	意味
<i>celoŋ meloŋ</i>	「悪ガキの様子」
<i>ceŋgol meŋgol</i>	「恥のない様子」
<i>jiki miki</i>	「水面の反射のようなきらきら」
<i>seled meled</i>	「穀物の種がいら混ざった様」
<i>gero mero</i>	「恥ずかしそうな、泣きそうな顔」

(iv) CVX kVX

感情語	意味
<i>dale kale</i>	「誰も面倒をみない様子」
<i>haŋi kuŋi</i>	「あれやこれやと振る舞わされる様」

(v) CVX gVX

感情語	意味
<i>rain gain</i>	‘good or bad principles of conduct’ (EM) ¹³
<i>mane gane</i>	「(行くか行かないか) ぐずぐずした様子」

(vi) CVX cVX

感情語	意味
<i>repo cepo</i>	「しわくちゃ」 ¹⁴
<i>dukur cukur</i>	「ドキドキする」 ¹⁵

(vii) CVX jVX

感情語	意味
<i>reŋge jeŋge</i>	「うんざりした様子」
<i>hauru jauru</i>	「話があちこちと飛ぶ様」
<i>runu junu</i>	「障害のために、歩くのが困難な様」

(viii) CVX dVX

感情語	意味
<i>rawa dawa</i>	「だれも邪魔する物がなく、何かがやれそうな様」

(ix) CVX tVX

¹³c.f. EM とは Encyclopaedia Mundarica を指し、この例はインフォーマントからは確認できなかったため、EM からそのまま引用している。

¹⁴*repo* は「(主に顔の) しわ」を意味し、最初の基本形に意味があるという意味ではエコー形式語とすべきかもしれない。

¹⁵*dukur* は「動悸がする」を意味するが、これもエコー形式語とすべきかもしれない。

感情語	意味
<i>ribui? tibui?</i>	「腰をふるわせて太った人が歩く様」
<i>roka toka</i>	「とても早い様」

(x) CVX sVX

感情語	意味
<i>boro soro</i>	「臆病な様」 ¹⁶

(xi) CVX rVX

感情語	意味
<i>tiri riri</i>	「横笛の音」

(C) 母音交替

数としてはこの母音交替形が多い。また、最初の部分に *a* を含むケースが多い。

(i) (C)aC[(C)a(C)] (C)uC[(C)u(C)]

感情語	意味
<i>dala dula</i>	「太って背の低い様」
<i>lada ludu</i>	「太った子供の様子」
<i>ṭapa? ṭupu?</i>	「よちよち歩き」
<i>tagam tugum</i>	「歩きづらいほど太った様」

(ii) CaC[a(C)(a)] CoC[o(C)(o)]

感情語	意味
<i>sar sor</i>	「ががつと食べる」
<i>karay koroy</i>	「喉がごろごろする」
<i>rakaṛa rokoṛo</i>	「箱やボトルのなかでカラコロと音がする」
<i>ḍaṇ ḍoṇ</i>	「深く大きな穴の様」
<i>pagad pogod</i>	「身体がむくんでいる様」

(iii) CaC[aC] CiC[iC]

感情語	意味
<i>palad pilid</i>	「あちこちからぴかりと光る様」
<i>par pir</i>	「散乱した様」

¹⁶*boro* は「怖がる」を意味する。これもエコー形式語とすべきかもしれない。

(iv) CaC[(C)aC] CeC[(C)eC]

感情語	意味
<i>paŋgad peŋged</i>	「明かりがあちこちで付いたり消えたりしている様」
<i>ca? ce?</i>	「コメを精米するときの様」

(V) CiCa(C) CoCo(C)

感情語	意味
<i>kidar kodor</i>	「ゆらゆらと風になびく様」
<i>kiṛaṇ koṛoṇ</i>	「背が高く痩せた様子」
<i>kica koco</i>	「(チューブから液体が) グニュグニュとでる様」
<i>gida godo</i>	「べたべたするもの」
<i>pica poco</i>	「中身が押し出されてなくなった様」

(vi) CiC CoC

感情語	意味
<i>bir bor</i>	「高くまっすぐに伸びた様」
<i>lir lor</i>	「長く細い枝の様」

3 ムンダ語感情語の統語論的分析

ムンダ語感情語の統語論的分析はこれまであまりやられてこなかった。筆者が書いた最初の文法書 (Osada 1992) では形態論的分析がほとんどで、統語論的分析はほとんどできていない。感情語は主部、述部、付加部の全ての位置に立ちうる。また、述部の主要部となれば派生接辞をとって受動形、反映形、受益形を形成し、アスペクト・マーカ―をとって述部を形成する¹⁷。

では、その例文をみていこう¹⁸。

- (1) *busu²-re seta-hon=e utul-putul-ta-n-a.*
straw-LOC dog-child=3SG:SUB **EXPR-PROG-INTR-IND**
「子犬が藁のなかで遊び、藁があちこちとまるで生きているようだ。」

- (2) *nir-nir-te=? aŋgor-saŋgor-giṛi-aka-n-a.*
run-run-ABL=3SG:SUB **EXPR-throw away-CONT-INTR-IND**
「走って走り回った結果、ハアハアと息が完全にあがってしまった。」

ムンダ語の経験動詞は経験者目的語をとる (c.f. Osada 1999)。いくつかの感情語はこの経験動詞と同様に経験者目的語をとる。その例をあげる。

¹⁷なお、ムンダ語の動詞構造は複雑である。詳細は文法概説 (Osada 2008) を参照せよ。ここでは繰り返さない。

¹⁸以下の例文に出てくる略語は次の通り。1,2,3=人称, ABL=Ablative, ANT=Anterior, COMPL=Completive, CONT=Continuous, EMPH=Emphatic marker, EPEN=Epenthesis, EXPR=Expressive, GEN=Genitive, IND=Indicative, INTR=Intransitive, LOC=Locative, NEG=Negator, OBJ=Objective, PROG=Progressive, SG=Singular, SUB=Subject, TOP=Topic marker, TR=Transitive.

- (3) *rua-te alae-balae-ki-[?]-ñ-a.*
 fever-ABL **EXPR-COMPL-TR-1SG:OBJ-IND**
 「熱でとてもしんどい」

感情語が付加部にたち、副詞的にふるまうケースがある。その場合、進行アスペクトと自動詞標識をともなうことも多い。

- (4) *kata-kata=e landa-ta-n-a.*
EXPR=3SG:SUB smile-PROG-INTR-IND
 「彼(女)は腹を抱えて笑っている。」

- (5) *iri[?]-iri[?]-ta-n=(e)-m landa-ta-n-a.*
EXPR-PROG-INTR=EPEN-2SG:SUB smile-PROG-INTR-IND
 「あなたは人を小馬鹿にしたように笑っている。」

感情語が主部にたち、名詞を修飾する。

- (6) *ini[?]-do janao ako[?]-bako[?] hoṛo-ge.*
 that person-TOP always **EXPR** person-EMPH
 「彼(女)はいつも馬鹿にされている人だ。」

感情語が目的語となるケースがある。

- (7) *ini[?]-a[?] isiṛi-sikiṛi ka=ñ suku-a.*
 that person-GEN **EXPR** NEG=1SG like-IND
 「私は彼女のこびたような笑いが嫌いだ。」

動詞の重複形と感情語が形式上よく似ている場合がある。しかし、重複しない部分が単語として意味を持つのが動詞の重複形であって、重複しない語形が意味を持たないのが感情語である。しかし、意味を持たない重複しない語形が完了アスペクト *ke* と自動詞標識 *n* をとるケースが以下にみられる。つまり、この *cadṭa* だけでは意味がないのに、(9) のように単独だけであらわれる。

- (8) *tii=[?] cadṭa-cadṭa-ke-d-a.*
 hand=3SG:SUB **EXPR-COMPL-TR-IND**
 「彼(女)は手をパチパチと叩いた。」

- (9) *cadṭa-ke-n=e[?] tabṛi-li-[?]-i-a.*
 clap-COMPL-INTR=3SG:SUB slap-ANT-TR-3SG:OBJ-IND
 「彼(女)はパチリと手を叩いた。」

4 ムンダ語感情語の意味論的分析

日本語のオノマトペといえ、ほとんどがこの意味に関する研究である。したがって、かなりの数の辞書も出版されている¹⁹。しかし、ムンダ語の感情語では意味の研究はこれまでで全くなされてこなかった。ムンダ語の百科事典であるEM (=Encyclopaedia Mundarica) は16巻からなる、膨大な語彙を含んでいる。しかし、そのEMにおける感情語の記述は詳細というには遠い。たとえば、次の語形をすべて同一の異形態とみなしている。

mogoe?, *mogoe?-mogoe?*, *mergoe?*, *mergoe?-mergoe?*, *merloñ*, *merloñ-merloñ*,
mirluñ, *mirluñ-mirluñ*, *moe?-moe?*, *mugui?*, *mugui?-mugui?*, *musui?*, *musui?-*
musui?.

われわれのインフォーマントによると、上に上げた *mogoe?-mogoe?*, *mirluñ-mirluñ*, *moe?-moe?* は聞いたことがないという。ところが、次の語形は間違いなく聞いたことがあり、しかもその意味が微妙にことなるのだという。その違いをあらわすと以下ようになる。

mergoe?-mergoe? 「口を動かしてにやりと笑う」
merloñ-merloñ 「歯がない老人や子供が歯を出して笑う」
mugui?-mugui? 「ほほをふくらませながら笑う」
musui?-musui? 「恥ずかしそうに目で笑う」

こうした意味領域と感情語の相違は日本語のオノマトペではよくみられる。ところが、ムンダ語や南アジア諸語あるいはオーストロアジア語族の感情語研究においてはこうした研究は筆者の知るかぎり出版されていない。そこで、ここでは「泣き」と「輝き」に関する感情語の例をあげておく。

1. 泣き

- (a) *kusud kusud* 「シクシクと泣く」
- (b) *sūi sūi* 「(身体をゆらさず) 鼻をすする」
- (c) *hūken hūken* 「(だれかが死んだときのよう)に号泣する」
- (d) *sāē sūi* 「泣き声が出ないように泣く」
- (e) *paraṛa puruṛu* 「(話をしながら) 涙だけが出る」
- (f) *piril piril* 「涙が止まらない」
- (g) *paral piril* 「目にいっぱい涙をためて大粒の涙がゆっくりと落ちる」
- (h) *sikid sikid* 「(子供が) しゃくり泣く」
- (i) *sukud sukud* 「(泣いたあとに、身体をゆらしながら) 鼻をすする」

2. 輝き²⁰

¹⁹たとえば、浅野(1978)、阿刀田・星野(1993)、天沼(1974)、尾野編(1984)、五味(1989)、白石編(1982)、チャン(1990)、飛田・浅田(2003)、三戸・笈(1984)、山口編(2003)とざっとあげても10以上の辞書が刊行されている。なお、日本語のオノマトペに関する研究書を参考文献にあげておいた。

²⁰以下のうち、*jaka maka* (*jhaka maka*), *jili mili* (*jhili mili*) については、インド・アリア諸語のサダニー語やドラヴィダ諸語のクルク語、ムンダ諸語のカリア語にみられることを長田(1990: 146-7)で指摘した。どれが南アジア共通の感情語で、どれがムンダ語特有の感情語なのか、今後の研究できちんかに行きたい。

- (a) *jaka jaka* 「(金のような) きらきらとした輝き」
- (b) *jaka maka* 「(絹のサリーのような) きらきらとした輝き」
- (c) *jiki miki* 「(革製品の) ぴかぴかとした輝き」
- (d) *caka maka* 「(銀や鉄の) 輝き」
- (e) *jili mili* 「(光が建物に反射した) ぴかぴかとした輝き」
- (f) *jilib jilib* 「(電気の) ぴかぴかした輝き」
- (g) *bijir bijir* 「雷のぴかっとした光」
- (h) *jilab jolob* 「(蛍の) ぴかっとした光」
- (i) *jolob jolob* 「(蛍の) あちこちでの光」
- (j) *jaran jaran* 「日の光」
- (k) *pirid pirid* 「(砂が) きらりと光る」
- (l) *pilid pilid* 「(星の) きらきらとした光り」

将来的にはこうしたムンダ語の感情語辞典を作成したいと考えている。そうした辞典が完成すると次に述べる音象徴研究が進むことは間違いない。

5 ムンダ語感情語の音象徴

日本語のオノマトペに関して、音象徴の研究は多い。よく言われるのが有声・無声の対立による意味の違いである。ゴロゴロ/コロコロ、バタバタ/パタパタ、ザラザラ/サラサラといった例である²¹。

しかし、言語学でよく言われるのは母音による音象徴である。とくに、サピアやイエス・ペルセンなど²²が指摘してから、次のようなことがよく言われる。

²¹ムンダ語にも、うえにあげた *jaka maka* と *caka maka* のような有声・無声の対立による意味の違いがあるが、まだまだ一般化できるほど例が多くない。これも今後の研究課題である。

²²Sapir (1929), Jespersen (1933), Ultan (1978)

‘it is often said that if vowel quality is used for size symbolism, [i] will symbolize smallness, and the lower vowels, especially [a], will symbolize largeness, with degrees in between’ (Diffloth 1994:107).

ところが、ディフロースはバーナル語から上記とは全く逆の例、つまり (i: big, a: small) を示すことを指摘している。

それではムンダ語ではどんなことが言えるのであろうか。次にあげる例は *i* は少ないことを、一方 *a* は大きいことを示しているようにみえる。

saṭa-saṭa 「少しながめの通り雨」

siṭi-siṭi 「通り雨」

jaṛam-jaṛam 「川が増水するほどの豪雨」

jiṛim-jiṛim 「水田が増水程度の激しい雨」

kaca-kaca 「身体を使って怒る」

kici-kici 「口で怒る」

次の例は母音の音象徴を考えるのに重要にみえる。

baya-baya 「だらだらと仕事をする」

buyu-buyu 「のらりくらしとしんどそうに歩く」

pisir-pisir 「(傘がなくてもぬれない程度の) こぬか雨」

pusur-pusur 「(ぬれてしまうような) 霧雨」

以上、これらの例から想定されるのは母音によるサイズに関する音象徴は次のように表される。

u > *a* > *i*.

これがどこまで言えるのか。今後の研究によって明らかにしていきたい。

6 ムンダ諸語の感情語

2008年、アンダーソン編集の『ムンダ諸語』が出版された。筆者も「ムンダ語」(単著)と「ホー語とケルワリア諸語」(アンダーソン、ハリソンとの共著)の二章の執筆に関わった。このムンダ諸語概説書はアンダーソンが用意した章立てを基本に、それぞれの執筆者が個別言語についての文法概説を書いている。その章立てのなかに、感情語 (Expressive) の項目がある。ジュアン語 (Patnaik 2008) やコルク語 (Zide 2008) のように、感情語の記述がまったくない章も存在するが、そのほとんどの章には感情語の記述がみられる。そこで、ここでその感情語の記述について、かんたんなコメントを箇条書きで述べておきたい。

1. まず、感情語の項目があるにもかかわらず、感情語とエコー形式語の区別がされていない。すでに述べたように、エメノーのエコー形式語はかなり限定的な定義であった。しかしながら、このムンダ諸語概説書にはエメノーの定義に沿ったエコー形式

語の用法はなく、感情語の項目に重複形式も含めたエコー形式語がすべて記述されており、「～とそれに類するもの」を意味するものとオノマトペ、つまり擬音語や擬態語などの区別がされていない。たとえば、サンタル語 (Ghosh 2008:73)、ソーラ語 (Anderson and Harrison 2008a:360-2)、ゴルム語 (Anderson and Rau 2008:413)、レモ語 (Anderson and Harrison 2008b:607-8)、グトブ語 (Griffiths 2008:665)、グタ語 (Anderson 2008:741-3) では形式だけが問題にされて、意味の区別にはほとんど言及されていない。また、カリア語にいたっては感情語の章に、エコー形式語と動詞の一部重複形だけが掲載されている (Peterson 2008:482-3)。

- 感情語にはエコー形式語だけではなく、Tag word も含まれるケースがある。たとえば、ゴルム語 (Anderson and Rau 2008:413)、カリア語 (Peterson 2008:482-3) やグタ語 (Anderson 2008:741-3) の場合である。Tag word とは反意語や同意語がペアをなして一つの意味をなす単語をさす。ムンダ語にも *nida singi* 「四六時中」 *nida* 「夜」 *singi* 「昼」などの Tag word があるが、これらは感情語に含まれることもないし、エコー形式語と区別されている。また、ムンダ語ではこうした対語が歌詞によく使われ、その分析を行った論考もある (Munda 1976)。
- 感情語の章に、動詞の重複形に言及したケースがみられる。たとえば、「ホー語とケルワリア諸語」 (Anderson, Osada and Harrison 2008:230-1)²³、ソーラー語 (Anderson and Harrison 2008a:360-2)、カリア語 (Peterson 2008:483)、グタ語 (Anderson 2008:741-3) では動詞の重複形にも言及している。こうなると、ディフロースやエメノーの定義はまったく無視されたことになる。
- 個別言語に言及すれば、サンタル語には浩瀚な辞書がある (Bodding 1932-36)。そこには豊富な感情語の記述がある。また、ソーラー語の辞書 (Ramamurti 1938) にも感情語への記述がある。それら辞書をみると、感情語研究に重要な例がみられる。たとえば、ソーラー語に次のような例がある。

mede:r-mede:r 'dim, dusky as faint light'

medo:r-mado:r 'glitteringly'

medo:r-me:do:r jɔŋ-ən 'the evening sunlight is called so'

こうした母音交替と意味の関係はぜひ知りたいところである。しかし、残念ながら、この辞書にも、今回の概説書にも説明はない。今後の研究課題としたい。

- 今回の概説書では、ソーラー語のように辞書がある場合には辞書から引用された感情語の例をとりあげているが、オリジナルな研究として、感情語の記述はほとんどされていない。個別言語記述で特筆すべきはカリア語 (Peterson 2008) である。筆者がフィールド調査をおこなった際には、カリア語には豊富な感情語があり、一部は長田 (1990) で発表しているが、ピーターソンはまったくオノマトペへの言及してい

²³このホー語とケルワリア諸語の執筆には長田も関わっている。したがって、長田にも責任があるかもしれない。しかし、実際のフィールドデータはアンダーソンとハリソンが集めたもので、そのデータにはかなり疑問をもっていたため、このホー語概説から長田の名前を削って頂くようにアンダーソンにはお願いしたが、ケルワリア諸語の比較語彙表 (pp.238-99) は長田が執筆したものである以上、共同執筆でということになったしである。自分の書いた項目へのコメントとなってはおかしいので注でその経緯を明らかにしておく。

ないばかりか、エメノーの定義を無視したエコー形式語や動詞の重複形を **Expressive** としてとりあげている。とても残念である。今回の概説書以外でも、60年代にシカゴ大学のムンダ語プロジェクトの一環として、博士論文が若い研究者によってまとめられたが、その文法書、たとえばソーラー語 (Starosta 1967)、ジュアン語 (Matson 1964)、レモ語 (Fernandez 1968) などには感情語の記述はまったくない。また、インド人研究者によって出版されたカリア語の文法書 (Biligiri 1965) やレモ (ボンダ) 語の辞書 (Bhattacharya 1968) にも感情語への記述がほとんどない。感情語の記述がないことがその当該言語に感情語が存在しないことを意味しない。そのことは感情語研究をする際に忘れてはならない。結局、感情語の記述には時間がかかり、文法記述の周縁部をなすため、なかなか研究が進まないというのが結論である。

7 結論

これまで述べてきたように、ムンダ語には豊富な感情語体系がみられる。ここに示したのはこの感情語体系の一部に過ぎない。筆者はムンダ語感情語の辞書を編纂したいと考えている。

ディフロースはじめ、多数の研究者が行ってきたように、オーストロアジア語族の感情語の研究がさかんなのだが、それを比較する研究はまだない。というのも、感情語の研究には時間がかかり、それぞれの言語の感情語研究の深度の違いが比較を難しくしている。また、オーストロアジア語族の感情語研究だけではなく、南アジアの諸言語にも同様の現象がみられることは「はじめに」のところで述べたとおりであるが、これらの研究もタミル語のように辞書があるものから、まだまだ記述が進んでいない言語まであって、こちらとの対照研究もまだまだ道半ばである。さらにいえば、オーストロアジア語族や南アジア諸語の感情語ばかりではない。日本語や韓国・朝鮮語にもこうした感情語（ご存じのように、日本語では擬態語や擬音語、あるいはオノマトペと呼ばれている）が豊富にみられるが、これらとの対照研究もぜひ行いたいと考えている。

ただし、ここでこうした比較対照研究を行うためには、まず何をもって感情語とするのか、しっかりと定義から議論を進める必要があるだろう。そうした定義の問題だけではなく、感情語の記述そのものについても、模範となるような研究が必要であろう。ムンダ語の感情語研究がまだまだ十分とはいえない今、まずムンダ語感情語の研究をしっかりとしたものとしていきたいと考えている。この小論がその第一歩となってくれることを願っている。

References

- [1] 浅野鶴子編 (1978) 『擬音語・擬態語辞典』角川書店。
- [2] 阿刀田稔子・星野和子 (1993) 『擬音語・擬態語使い方辞典』創拓社。
- [3] 天沼寧 (1974) 『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版。
- [4] 泉邦寿 (1976) 「擬声語・擬音語の特質」鈴木孝夫編『日本語の語彙と表現』大修館書店。105-151頁。

- [5] 尾野秀一編（1984）『日英擬音・擬態語活用辞典』北星堂書店。
- [6] 荻阪直行（1999）『感性のことばを研究する』新曜社。
- [7] 長田俊樹（1990）「インド東部チョターナーグプル地方における言語輻合について」『内陸アジア言語の研究』6:143-177.
- [8] 笈壽雄・田守育啓（1993）『オノマトピア 擬音・擬態語の樂園』勁草書房。
- [9] 五味太郎（1989）『英語人と日本語人のための日本語擬態語辞典』ジャパンタイムス社。
- [10] 小林英夫（1976）「象徴音の研究」『小林英夫著作集5 言語美学論考』みすず書房。251-340頁。
- [11] 白石大二編（1982）『擬音語擬態語慣用語辞典』東京堂出版。
- [12] 鈴木雅子（1984）『擬声語・擬音語・擬態語』鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法4』明治書院。
- [13] 田守育啓（1991）『日本語オノマトペの研究』神戸商科大学経済研究所。
- [14] 田守育啓、ローレンス・スコウラップ（1999）『オノマトペー形態と意味ー』くろしお出版。
- [15] 田守育啓（2002）『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』岩波書店。
- [16] 丹野眞智俊（2005）『オノマトペ（擬音語・擬態語）を考える』あいり出版。
- [17] チャン、アンドルー（1990）『和英擬態語・擬音語分類用法辞典』大修館書店。
- [18] 飛田良文・浅田秀子（2003）『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版。
- [19] 松田徳一郎編（1985）『日英擬音語辞典』研究社。
- [20] 三戸雄一・笈壽雄編（1984）『日英対照：擬声語辞典』学書房。
- [21] 山口仲美編（2003）『暮らしのことば 擬音語・擬態語辞典』講談社。
- [22] Abbi, Anvita. (1992a) *Reduplication in South Asian Languages: An Areal, Typological and Historical Study*. Delhi: Allied Publishers.
- [23] ———. (1992b) Contact, conflict and compromise: the genesis of reduplicated structures in South Asian languages. In Dimock, Edward C., Kachru, Braj B. and Krishnamurti, Bh. (eds.) *Dimensions of Sociolinguistics in South Asia*. New Delhi: Oxford & IBH Publishing Company. pp. 131-148.
- [24] ———. (1994) *Semantic Universals in Indian Languages*. Simla: Indian Institute of Advanced Study.

- [25] Anderson, Gregory D.S. (2008a) Introduction to the Munda languages. In Gregory D.S. Anderson (ed.) *The Munda Languages*. London and New York: Routledge. pp. 1-10.
- [26] ———. (2008b) Gta?. In Gregory D.S. Anderson (ed.) *The Munda Languages*. London and New York: Routledge. pp. 682-763.
- [27] ——— and K. David Harrison. (2008a) Sora. In Gregory D.S. Anderson (ed.) *The Munda Languages*. London and New York: Routledge. pp. 299-380.
- [28] ——— and ——— (2008b) Remo (Bonda). In Gregory D.S. Anderson (ed.) *The Munda Languages*. London and New York: Routledge. pp. 557-632.
- [29] ———, Toshiki Osada and K. David Harrison (2008) Ho and the other Khaerwarian languages. In Gregory D.S. Anderson (ed.) *The Munda Languages*. London and New York: Routledge. pp. 195-255.
- [30] ——— and Felix Rau (2008) Gorum. In Gregory D.S. Anderson (ed.) *The Munda Languages*. London and New York: Routledge. pp. 381-433.
- [31] Anderson, Gregory D.S. (ed.) (2008) *The Munda Languages*. London and New York: Routledge.
- [32] Apte, Mahadeo L. (1968) *Reduplication, Echo Formation, and Onomatopoeia in Marathi*. Poona: Deccan College.
- [33] Arunachalam, M. (1977) Echo-words in Tamil. *Journal of Tamil Studies* 11: 1-10.
- [34] Benjamin, Geoffrey (1976) An outline of Temiar grammar. In Philip N. Jenner, Lawrence C. Thompson and Stanley Starosta (eds.) *Austroasiatic Studies* Honolulu: The University Press of Hawaii. Part 1:129-187.
- [35] Bhattacharya, Sudhibhushan (1968) *A Bonda Dictionary*. Poona: Deccan College.
- [36] Bhaskararao, Peri. (1977) *Reduplication and Onomatopoeia in Telugu*. Poona: Deccan College.
- [37] Biligiri, H. S. (1965) *Kharia: Phonology, Grammar and Vocabulary*. Poona: Deccan College.
- [38] Bodding, P. O. (1932-1936) *A Santali Dictionary*. Vols. 5. Oslo: Det Norske Videnskaps Akademi.
- [39] Burenhult, Niclas (2002) *A Grammar of Jahai*. Lund: Department of Linguistics and Phonetics, Lund University.
- [40] Burrow, Thomas and M.B. Emeneau (1984) *A Dravidian Etymological Dictionary. Second Edition*. (=DEDR) Oxford: Clarendon Press.

- [41] Campbell, Lyle (2006) Areal linguistics: a close scrutiny. In Y. Matras, A. McMahon, N. Vincent (eds.) *Linguistic Areas: Convergence in Historical and Typological Perspective*. London. pp. 1-31.
- [42] DiCanio, Christian (2005) Expressive alliteration in Mon and Khmer. *University of California, Berkeley Lab Annual Report* pp. 337-393.
- [43] Diffloth, Gérard (1968) *The Iru language: a close relative of Tamil*. Ph.D. Dissertation. University of California.
- [44] ———. (1972) Notes on expressive meaning. *Papers from the Eighth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society* pp. 440-448.
- [45] ———. (1976a) Jah-Hut: an Austroasiatic language of Malaysia. In Nguen Dang Lin (ed.) *Pacific Linguistics: South-east Asian Linguistic Studies 2* pp. 73-118.
- [46] ———. (1976b) Expressives in Semai. In Philip N. Jenner, Lawrence C. Thompson and Stanley Starosta (eds.) *Austroasiatic Studies* Honolulu: The University Press of Hawaii. Part 1: 249-264.
- [47] ———. (1979) Expressive phonology and prosaic phonology. In *Studies in Thai and Mon-Khmer Phonetics and Phonology*. Bangkok: Chulalongkong University Press. pp. 49-59.
- [48] ———. (1994) i: big, a: small. In Leanne Hinton, Johanna Nichols and John Ohala (eds.) *Sound Symbolism*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 107-114.
- [49] ———. (2002) Les expressifs de Surin et où cela conduit. *Bulletin de l'École Française d'Extrême Orient* 88:261-269.
- [50] Emeneau, Murray B. (1938) Echo-words in Toda. *New Indian Antiquary* 1: 109-117.
- [51] ———. (1955) *Kolami: a Dravidian language*. London: Cambridge University Press.
- [52] ———. (1956) India as a linguistic area. *Language* 32: 1-17. In Emeneau (1980: 19-37).
- [53] ———. (1969) Onomatopoeics in the Indian linguistic area. *Language* 45: 274-299. In Emeneau (1980: 250-293)
- [54] ———. (1980) *Language and Linguistic Area*. Selected and introduced by Anwar S. Dil. Stanford: Stanford University Press.
- [55] ——— and Kausalya Hart. (1993) Tamil expressives with initial voiced stops. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. 56: 75-86.
- [56] Fernandez, F. (1968) *A Grammatical Sketch of Remo: A Munda Language*. Ph.D. Dissertation. University of North Carolina.
- [57] Fitzgerald-Cole, Jennifer (1996) Reduplication meets the phonological phrase in Bengali. *Linguistic Review* 13: 305-356.

- [58] Gasser, Michael, Nitya Sethurama and Stephen Hockema (2005) Iconicity in expressives: an empirical investigation. In Sally Rice and John Newman (eds.) *Experimental and Empirical Methods*. Stanford: CSLI publications. pp. 1-18.
- [59] Ghosh, Arun (2008) Santali. In Gregory D.S. Anderson (ed.) *The Munda Languages*. London and New York: Routledge. pp. 11-98.
- [60] Gnanasundaram, V. (1972) On echo words in Tamil. In Subramonian, V.I. (ed.) *Proceedings of the 1st Conference of Dravidian linguists*. Trivandrum: University of Kerala. pp. 247-254.
- [61] Gordon, Kent (1989) Echo-words among the Todas revisited. In P. Samermit and D. Thomas (eds.) *Linguistics and Worldview in Honor of Professor Kenneth L. Pike*. Bangkok: Thammasat University and Summer Institute of Linguistics Language Research and Development Project. pp. 113-143.
- [62] Griffiths, Arlo (2008) Gutob. In Gregory D.S. Anderson (ed.) *The Munda Languages*. London and New York: Routledge. pp. 633-681.
- [63] Hendricks, Sean (2002) Bare consonant reduplication without prosodic templates: expressive reduplication in Semai. *Journal of East Asian Linguistics* 10:287-306.
- [64] Hettiaratchi, D. (1959) Echo words in Sinhalese. *University of Ceylon Review* 17(1):247-50.
- [65] Hoffmann, John (1903) *Mundari grammar*. Calcutta: Government Press.
- [66] ———. (1930-78) *Encyclopaedia Mundarica (=EM.)* Patna: Government Press.
- [67] Jespersen, O (1933) Symbolic value of the vowel i. In *Linguistica: Selected Papers of O. Jespersen in English, French and Germany*. Copenhagen: Levin and Munksgaard. pp. 283-301.
- [68] Jha, C., K. Sadanand, and K.G. Vijayakrishnan (1997) Some salient properties of echo word formation in Indian Languages. in M. Hariprasad, H. Nagarajan, P. Madhavan and K.G. Vijayakrishnan (eds). *Phases and Interfaces of Morphology*. Hyderabad: CIEFL Publications. pp. 134-148.
- [69] Keane, Elinor. 2001. *Echo words in Tamil*. D. Ph. Thesis, Merton College, Oxford. (<http://users.ox.ac.uk/~sjoh0535/Thesis/>)
- [70] Kothandaraman, P. (1983) A note on the echo words in Tamil. *Journal of Asian Studies* 1: 165-169.
- [71] Krishnamurti, Bh. (2003) *The Dravidian Languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- [72] Kruspe, Nicole (2004) *A Grammar of Semelai*. Cambridge: Cambridge University Press.

- [73] Lids, Jeffrey (2001) Echo reduplication in Kannada and the theory of word-formation. *The Linguistic Review*. 18(4):375-394.
- [74] Mahapatra, K. (1976) Echo-formation in Gta[?]. In Philip N. Jenner, Laurence C. Thompson and S. Starosta (eds.) *Austroasiatic Studies*. Part 2: 815-831.
- [75] Masica, Colin. (1976) *Defining a Linguistic Area: South Asia*. Chicago: University Press of Chicago.
- [76] ———. (1991) *The Indo-Aryan Languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- [77] Matras, Y., A. McMahon, N. Vincent (eds.) (2006) *Linguistic Areas: Convergence in Historical and Typological Perspective*. London: Palgrave Macmillan.
- [78] Matson, D. M. (1964) *A Grammatical Sketch of Juang*. Ph.D. Dissertation. University of Wisconsin.
- [79] Maynard, Senko K. (2005) *Expressive Japanese*. University of Hawaii Press.
- [80] Migliazza, Brian (2005) Some expressives in So. *Ethnorema* 1 (Online Journal <http://www.ethnorema.it/>)
- [81] Munda, Ram Dayal (1976) Some formal features of traditional Mundari poetry. In Philip N. Jenner, Laurence C. Thompson and S. Starosta (eds.) *Austroasiatic Studies*. Part 2: 843-871.
- [82] Murthy, M. Chidananda. (1975). Formation of echo-words in Kannada. In G.N. Reddy and P. Somasekharan Nair (eds.) *Proceedings of the 2nd All India Conference of Dravidian linguists*. Trivandrum: University of Kerala. pp. 158-164.
- [83] Muysken, Pieter (ed.) (2008) *From Linguistic Areas to Areal Linguistics*. John Benjamins.
- [84] Osada Toshiki (1991) Notes on linguistic convergences in Chotanagpur area. In Sanjay Bosu-Mullick (ed.) *Cultural Chotanagpur: Unity in Diversity*. Delhi: Uppal. pp. 99-119.
- [85] ———. (1992) *A Reference Grammar of Mundari*. Tokyo: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
- [86] ———. (1999) Experiential constructions in Mundari. *Gengo Kenkyu: Journal of Japanese Linguistic Society* 115:51-76.
- [87] ———. (2008) Mundari. In Gregory D.S. Anderson (ed.) *Munda languages*. London and New York: Routledge. pp. 99-164.
- [88] Patnaik, Manideepa (2008) Juang. In Gregory D.S. Anderson (ed.) *The Munda Languages*. London and New York: Routledge. pp. 508-556.

- [89] Peterson, John (2008) Kharia. In Gregory D.S. Anderson (ed.) *The Munda Languages*. London and New York: Routledge. pp. 434-507.
- [90] Ramamurti, G. V. (1938) *Sora-English Dictionary*. Madras: Government Press.
- [91] Saksena, Baburam. (1937) *Evolution of Awadhi*. Allahabad: Indian Press.
- [92] Sapir, Edward (1929) A study in experimental symbolism. *Journal of Experimental Psychology* 12: 225-239.
- [93] Singh, Amar Bahadur (1969) On echo words in Hindi. *Indian Linguistics* 30: 185-195.
- [94] Sridhar, S. N. (1990) *Kannada*. London: Routledge.
- [95] Starosta, Stanley (1967) *Sora Syntax: A Generative Approach to a Munda Language*. Ph.D. Dissertation. University of Wisconsin.
- [96] Svantesson, Jan-Olof (1983) *Kammu Phonology and Morphology*. Lund: CWK Gleerup.
- [97] Trivedi, G. M. (1990) Echo formation. In Krishan, S. (ed.) *Linguistic traits across language boundaries (a report of All India Linguistic Traits Survey)*. Calcutta: Director General, Anthropological Survey of India. pp. 51-82.
- [98] Turner, R.L. (1966-71) *A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages*. (=CDIAL). 3 Vols. London: Oxford University Press.
- [99] Ultan, R. (1978) Size-sound symbolism. In J. H. Greenberg, C. R. Ferguson and E. A. Moravcsik (eds.) *Universals of Human Language: Phonology*. Stanford University Press. pp. 527-568.
- [100] Urban, Meteusy (2007) Defining the linguistic area/ league: an invitation to discussion. *Studia Linguistica* 124:137-159.
- [101] Williams, J. (1991) A note on echo word morphology in Thai and the languages of South and South-East Asia. *Australian Journal of Linguistics* 11: 107-111.
- [102] Wiltshire, Caroline R. (1999) Expressives in Tamil: Evidence for a word class. In Rajendra Singh (ed.) *The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics*, New Delhi/Thousand Oaks/London: Sage Publications. pp. 119-137.
- [103] Zide, Norman (1976) A note on Gta² echo forms. In Philip N. Jenner, Laurence C. Thompson and S. Starosta (eds.) *Austroasiatic Studies*. Part 2: 1335-1334. ———. (2008) Korku. In Gregory D.S. Anderson (ed.) *The Munda Languages*. London and New York: Routledge. pp. 256-298.

Appendix
ムンダ語感情語辞典見本

1. ムンダ語 *ael-ael*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अएल्-अएल्
ヒンディー語 खाली खाली जगह होना / रहना.

<意味> (お腹が) すいている状態。

(例) *lai[?] ael-ael-ja-[?]-ñ-a*

(訳) わたしはお腹がすいています。

《類語》

1. *ael-pael*

英語 to be hungry

2. ムンダ語 *ael-pael*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अएल्-पएल्
ヒンディー語 खाली खाली जगह होना / रहना.

<意味> (土地や部屋に) 物があまりない状態。窮屈ではない状態。

(例) *ael-pael-ta-n-bu dub-a.*

(訳) 私たちは間隔をあけてすわりましょう。

英語 in the open space

3. ムンダ語 *akab-akab*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अकब्-अकब्
ヒンディー語 सफेदी

<意味> 真っ白な。

(例) *aṭal baa akab-akab-ta-n lel-o[?]-ta-n-a.*

(訳) アタルの花が真っ白に見えている。

英語 absolutely white

4. ムンダ語 *akal-bakal*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अकल्-बकल्
ヒンディー語 अकबकी, परेशान होना.

<意味> 不安な状態。(期待する物がなかったり、来なかったりしたとき) 心配する状態。

(例) *rua-te jii-ko akal-bakal-ja-[?]-ñ-a*

(訳) 病気で、わたしは不安な気分です。

《類語》

1. *akul-bakul*

<意味> (恐怖や怒りなどによる) 精神が不安な状態。

2. *alae-balae*

<意味> (熱があつたり、出産の時などの) 苦しい様子。

3. *ukul-bukul*

<意味> (何が起こるか) 不安になる状態。

英語 *restlessness and fretting of sick people; to experience restlessness in sickness*

5. ムンダ語 *ako[?]-bako[?]*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अकोः - बकोः

ヒンディー語 पागल.

<意味> 集中力がなく、いつもぼけっとしている。

(例) *ini[?] do janao ako[?]-bako[?] ho^o ge.*

(訳) その人はいつもぼけっとした人だ。

英語 *to stupefy, to render stupid, half mad*

6. ムンダ語 *akur[?]-bakur[?]*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अकुड़ - बकुड़

ヒンディー語 नदी का पानी उमड़ते हुए बहना.

<意味> (川の水が増水によって) 波打つように流れている様子。

(例) *gara da[?] akul[?]-bakul[?]-ta-n ringi[?]-ta-n-a.*

(訳) 川の水が波打つように流れている。

《類語》

1. *henko-benko* (道が) 曲がりくねっている。

英語 *to flow in a rolling manner*

7. ムンダ語 *akul[?]-bakul[?]*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अकुल् - बकुल्

ヒンディー語 हिचकिचाना, परेशान होना.

<意味> (恐怖や怒りなどによる) 精神が不安な状態。

(例) *kiisi-te jii-ko akul[?]-bakul[?]-ja-[?]-ñ-a*

(訳) 怒りで、わたしは不快な気分です。

《類語》

1. *akal-bakal*

<意味> (期待する物がなかったり、来なかったりしたとき) 心配する状態。

2. *ukul-bukul*

<意味> (何が起こるか) 不安になる状態。

英語 (1) *imprsl.*, denotes the feeling experienced in a disordered stomach of the movement of its contents hither and thither (not directly descriptive of the rumblings generally accompanying them) (2) *prs.*; with *lai[?]* as *sbj.* same meaning

8. ムンダ語 *agaram-bagaram*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अगड़म् - बगड़म्

ヒンディー語 अस्त - व्यस्त समानों का होना.

<意味>めちゃくちゃになる。ぐちゃぐちゃな様子。(薪や棒などの固形物。駐車場の車がぐちゃぐちゃにおいてある場合もさす)

(例) *naminān agaṛam-bagaṛam-re ama[?] saman kota[?]-re nam-o[?]-a.*

(訳) こんなにめちゃくちゃな状態で、おまえの荷物はどこにも見つからない。

《類語》

1. *aṛa-baṛa*

<意味> (稲穂とその他の雑穀の種が一緒になって) ぐちゃぐちゃになる。

2. *sadur-badur*

<意味> (藁、稲など) めちゃくちゃ。乱雑に置いている様。

3. *saruin-paṭuin*

<意味> (糸が絡まって) ぐちゃぐちゃになる。

4. *sagur-bagur*

<意味> (服など、ちゃんと整理されていた物が) ぐちゃぐちゃにする。ぐちゃぐちゃにする。

英語 (1) disorder, a disorderly state of things. (2) perturbation of mind; (1) to put out of order, to put into disorder (2) to cause confusion in someone else's mind, to make it impossible for.

9. ムンダ語 *agul-tagul*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अगुल्-तगुल्

ヒンディー語 बिना कँधी उलझा हुआ बाल.

<意味>毛深い様。

英語 long shaggy hair

10. ムンダ語 *anka-baṅka*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अङ्क-बङ्क / अँक-बँक

ヒンディー語 टेड़ी-मेड़ी.

<意味> (廃墟のように) 家の壁やドアだけが残っているように。

(例) *hoṛo-ko asam-te-ko seno[?]-ja-n-a. ad oṛa[?] do anka-baṅka-ta-n rika-ta-n-a.*

(訳) 人たちはアッサムに行ってしまったので、家は壁やドアだけが残る廃墟になっている。

英語 not straight

11. ムンダ語 *aṅgar-uṅgur*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अङ्गर्-उङ्गर् / अँगर्-उँगर्

ヒンディー語 इधर-उधर ताकना, देखना.

<意味> (突然気がついて、上の方を) キョロキョロ見る。

(例) *acaka ge birid-ja-n-ci aṅgar-uṅgur-ta-n-e[?] arid-beṛa-ja-d-a.*

(訳) 彼(彼女)は突然起きあがると、キョロキョロと見ている。

英語 to look around

12. ムンダ語 *aṅgid-taṅgid*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अङ्गिद्-तङ्गिद् / अँगिद्-तँगिद्

ヒンディー語 व्याकुलता से बदहोशी.

<意味> (おもに悪霊が取り付いたとみなされるせいで) 息苦しくなる。息絶え絶えとなる。

(例) *boṅga-e nam-ki-[?]e-a. aṅgid-taṅgid-ta-n-e[?] rika-ta-n-a.*

(訳) 悪霊が取り付いた。息絶え絶えとなっている。

英語 to feel suffocated

13. ムンダ語 *aṅgor-saṅgor*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अङ्गोर्-सङ्गोर् / अँगोर्-सँगोर्

ヒンディー語 हाँफना.

<意味> (走った後や病気の時に) ハアハアと息をする。息が上がる。

(例) *nir-nir-te-[?] aṅgor-saṅgor-giṛi-aka-n-a.*

(訳) 走って走って、ハアハアと息がすっかり上がっている。

《類語》

1. *sā sō*

<意味> (走った後などに) 呼吸が乱れる。 *aṅgor-saṅgor* に比べると、息の上がりぐらいが少ない。

英語 to breathe deeply

14. ムンダ語 *acaṅḍaṅ-ucunḍiṅ*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अचण्डङ्-उचुण्डिङ् / अचँडँ-उचुँडिँ

ヒンディー語 कुल्हा को ऊपर-नीचे हिलाना या करना.

<意味> 腰を振る。お尻を振る。腰 (お尻) をふりながら歩く。

(例) *laṅḍi-ko acaṅḍaṅ-ucunḍiṅ-ja-d-a.*

(訳) お尻を振りながら歩いている。

英語 to move the bottom to and for; to waddle

15. ムンダ語 *acar-vicar*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अचर्-विचर्

ヒンディー語 आचार-विचार.

<意味> 考え方。

(例) *pancaṅ-it-re acar-vicar do mena[?]-ge-a.*

(訳) パンチャヤット (村の集会) でいろいろな考え方があがる。

英語 conduct, behaviour

16. ムンダ語 *acad-ucud*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अचद्-उचुद्

ヒンディー語 ऊँचा-नीचा

<意味> (土地や水田などが) でこぼこしている。でこぼこした状態。(木のこぶが) でこぼこしている。

(例) *loyoñ acad-ucud-ta-n mena?*

(訳) 水田がでこぼこしている。

英語 heaps, mounds, hillocks; to thrown earth in heaps unevenly

17. ムンダ語 *ajaṛa-bajaṛa*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अजड़-बजड़

ヒンディー語 बझा हुआ, उलझा हुआ.

<意味> (稲籾と別の雑穀の種が混ざって) ぐちゃぐちゃになる。

(例) *baba jañ ad kod jañ mod-re ajaṛa-bajaṛa-aka-n-a.*

(訳) 稲籾とシコクビエの種が一つに混ざって、ぐちゃぐちゃになっている。

英語 to make tangled

18. ムンダ語 *aja-baja*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अज-बज

ヒンディー語 बातों का बतंगड़ बनाना.

<意味> ぐちゃぐちゃになる。込み入る。

(例) *aja-baja kaji-ko-te=le bapagaṛao-ja-n-a.*

(訳) 込み入った話で、私たちは関係を悪くしてしまった。

英語 (1) to entangle, to ravel thread (2) to entangle smb, to impede or catch by entangling

19. ムンダ語 *aja[?]-baja[?]*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अजः-बजः

ヒンディー語 तोतोली बोली बोलना.

<意味> ちゃんとしゃべることができない。

(例) *jagar-itun-ta-n-hon-ko aja[?]-baja[?]-ta-n=ko jagar-e-a.*

(訳) ことばを覚えようとしている人は間違い間違いしゃべる。

英語 (1) to speak a language incorrectly (2) to confound or confuse smb. by threats or otherwise so as to make him talk incoherently.

20. ムンダ語 *aṭakal-uṭukul*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अटकल्-उटुकुल्

ヒンディー語 यहाँ-वहाँ ऊँचा-नीचा उठा हुआ.

<意味> (チャパティなどが、作るときに失敗して) でこぼこしている。

(例) *lad atakal-uṭukul-ta-n mō-ja-n-a.*

(訳) チャパティがでこぼこにふくらんだ。

英語 EMに記載なし

21. ムンダ語 *aŋdo[?]-maŋdo[?]*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अण्डोः - मण्डोः / अँडोः - मँडोः

ヒンディー語 नगुरी भाषा बोलना.

<意味>ナグリー方言をしゃべる。

(例) *ini[?] do-e[?] aŋdo[?]-maŋdo[?]-ke-d-le-a.*

(訳) 彼はナグリー方言で我々に話しかけた。

英語 to speak the Naguri dialect

22. ムンダ語 *adili-badili (adola-badola)*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अदिलि - बदिलि (अदोल - बदोल)

ヒンディー語 अदल - बदल.

<意味>交換。(交換できるほど) いっぱいある。

(例) *ae[?]-ta[?]-re saṛi adili-badili mena[?].*

(訳) 彼女のところにはサリーがいっぱいある。

英語 exchange

23. ムンダ語 *adil-padil*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अदिल् - पदिल्

ヒンディー語 दूर - दूर बैठना.

<意味>部屋などが窮屈ではなく、十分空間がある様。

(例) *adil-padil-bu dub-a.*

(訳) ゆったり間をあけて座りましょう。

英語 EMには記載なし

24. ムンダ語 *ad-mad*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अद् - मद्

ヒンディー語 1. भूला भटका. 2. अनजान.

<意味>よくわからない (人間)。怪しい (人間)。

(例) *idu, ne hoṛo do kota[?]-ren ad-mad hoṛo.*

(訳) さあ、この人はどこの誰だかわからない人だ。

英語 unknown

25. ムンダ語 *ana[?]-mana[?]*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अनः - मनः

ヒンディー語 तरह तरह के.

<意味>いろいろ。

(例) *ako oṛa[?]-re ana[?]-mana[?] saṛi mena[?].*

(訳) 彼らの家にはいろいろなサリーがある。

英語 all kinds, a variety of things

26. ムンダ語 *ambar-dumbar*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अम्बर्-दुम्बर् / अंबर्-दुंबर्

ヒンディー語 5 से 6 महीने के बच्चे का उम्र होना.

<意味> 2, 3才までの赤ん坊が元気な様。

(例) *añ-a[?] hon do ambar-dumbar sen-bara-e-re-[?] baṅgai[?]-ja-n-a*

(訳) 私の子供は2, 3才で元気だったのに、死んでしまった。

英語 of babies over 5 or 6 months old, lively, sprightly. Also used jokingly of young people, full of life and fun

27. ムンダ語 *āya-bāya*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अँय-बँय

ヒンディー語 जिन्दगी भट जाना.

<意味> (仕事もしないし、努力もしない、人生の目標もないような) 困った様子や人。

(例) *āya-bāya-ta-n asam-sa[?]-te-[?] nir-ad-en-ja-n-a.*

(訳) 彼(彼女)は何もしないでアッサムへ逃げて行方不明になった。

英語 (1)perplexity, helplessness, especially about one's livelihood (2) expenditure that cannot be accounted for

28. ムンダ語 *alae-balae*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अलए-बलए

ヒンディー語 परेशानी, परेशान होना.

<意味> (熱があつたり、出産の時などの) 苦しい様子。

(例) *rua-te alae-balae-ki-[?]-ñ-a.*

(訳) 私は熱でとても苦しかった。

英語 pain, trouble, misfortune, misery destitution

29. ムンダ語 *ala-jola*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अल-जोल

ヒンディー語 एक ही समय के.

<意味> (子供が) 同じ時期に生まれた。

(例) *inku do ala-jola-ren hon-ko ge*

(訳) 彼らは同じ時期に生まれた子供たちだ。

英語 a same generation

30. ムンダ語 *ali-pali*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अलि-पलि

ヒンディー語 पारी-पारी.

<意味> 外は乾いているが、中が湿っている状態。

(例) *ne ote ali-pali-ge-a.*

(訳) この地面は外は乾いているが、中は湿っている。

英語 wet inside

31. ムンダ語 *alu[?]-balu[?]*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अलुः-बलुः

ヒンディー語 पागल की तरह.

<意味>

1. (夫に先立たれた妻が夫のことばかり考えているためにおこる) 精神不安定な状態。

2. 病み上がりの人が心身ともまだまだしっかりしていない状態。

(例) *rua-ate-[?] birid-le-n-a, mendo alu[?]-balu[?]-ta-n-a-e[?]*

(訳) 彼(女)は病気はよくなったが、まだまだしっかりしていない。

英語 insane

32. ムンダ語 *ara[?]-uru[?]*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अड़ः-उड़ुः

ヒンディー語 द्विविधा में पड़ना.

<意味> あれやこれやと、考える。思案する。

(例) *pñi-te-ñ seno[?]-a ci ka, ara[?]-uru[?]-ja-[?]-ñ-a*

(訳) 市場に行こうか行くまいか、思案している。

英語 doubt, hesitation, perplexity; to hesitate

33. ムンダ語 *ara-caṛa*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अड़-चड़

ヒンディー語 मौका.

<意味> 機会を得ること。

(例) *hon kuṛi ta[?]-te-ñ sen-ke-n-a. jai-ñ kuṛi ka-e[?] ara-caṛa-ki-[?]-ñ-a. enate ka-ñ hiju[?]-daṛi-ja-n-a.*

(訳) 娘のところに行ったら、孫娘が(帰る)機会を与えなかったので、私は帰ってこられなかった。

英語 a time of remissness in watchfulness; to leave something unguarded for a moment

34. ムンダ語 *ānga-dānga*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 अअङ्ग-डअङ्ग / आँग-डाँग

ヒンディー語 सुन-सान.

<意味> (家も村もない) 人里離れた寂しく、何も無いのが見渡せるような場所。

(例) *alaṅga-dalaga piṛi do boro-ge-ñ ṭolor-o[?]-a.*

(訳) 人里離れた野原は、私には怖く感じる。

英語 far away and lonely

35. ムンダ語 *ica[?]-pica[?]*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 इचः - पिचः

ヒンディー語 सब कोई को बराबर-बराबर मैं बाँटना.

<意味> (親指と人差し指でつまむ程度に) 全員に対し均等に分ける。

(例) *ne sim poṭa soben-ko ica[?]-pica[?]-ta-n haṭin-ke-pe.*

(訳) この鶏の内蔵を全て平等に分けなさい。

英語 to distribute equally

36. ムンダ語 *iri[?]-iri[?]*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 इरिः - इरिः

ヒンディー語 हँसी.

<意味> (誰彼なく) ふざけて、笑う。

(例) *iri[?]-iri[?]-ta-n-em landa-ta-n-a.*

(訳) あなたは誰彼なく、ふざけて笑っている。

《類語》

英語 laugh

37. ムンダ語 *isiri-isiri*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 इसिड़ि - इसिड़ि

ヒンディー語 हँसी.

<意味> (子供たちなどがのぞき見しているときに、目と目が合った際に) 恥ずかしそうに、はにかみながらニコニコと笑う。

(例) *hon-ko isiri-isiri ge pura[?] mena[?].*

(訳) 子供たちははにかみながらニコニコとよく笑う。

英語 laugh

38. ムンダ語 *isiri-sikiri*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 इसिड़ि - सिकिड़ि

ヒンディー語 चँचल हँसी.

<意味> (大人の女性が辺り構わず、媚びを売るように) 笑う。

(例) *goma do jae-lo[?] ge isiri-sikiri-ta-n-e[?] lapand-a.*

(訳) ゴマはどんな人とも、媚びを売るように笑い合う。

英語 laugh

39. ムンダ語 *irin-birin*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 इड़िड़ि - बिड़िड़ि

ヒンディー語 पानी में कीड़ो की हरकते करना.

<意味> (細長いムシが水の中で) いっぱい泳いでいる様。

(例) *da[?]-re tiju-ko irin-birin-ta-n-ko lel-o[?]-ta-n-a.*

(訳) 水の中でムシがいっぱい泳いでいるのが見えている。

《類語》

1. *beṭeñ-beṭeñ*

<意味> (ボウフラが水の中で) いっぱい泳いでいる様。

2. *biṭuñ-biṭuñ*

<意味> (化膿した傷口にウジ虫が) いっぱいいる様子。

英語 many insects

40. ムンダ語 *ukul-bukul*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 उकुल्-बुकुल्

ヒンディー語 धुक-धुकी करना.

<意味> (何が起こるか) 不安になる。

(例) *ukul-bukul-ja-ʔ-ñ-a.*

(訳) (将来何が起こるか) 私は不安です。

英語 anxious

41. ムンダ語 *ugui-ugui*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 उगुइ-उगुइ

ヒンディー語 नाँप की तरह गरमी लगना। होना.

<意味>

1. 肌に焼けつくような、カンカン照り。

(例) *ugui-ugui-ta-n jeṭe-ta-n-a.*

(訳) 肌に焼きつくように、日差しがきつい。

2. 火傷の後がヒリヒリする。

(例) *lolo-gao ugui-ugui-ta-n hasu-ja-ʔ-ñ-a.*

(訳) 火傷がヒリヒリと痛い。

3. 外から見たら、火が大きくないが、火力が強い状態。

(例) *seṅgel ugui-ugui jul-ta-n-a.*

(訳) 炎は小さいが、火力が強い状態で、火が燃えている。

英語 burning

42. ムンダ語 *ucuru-cumbud (ucuru-cumbuṛu)*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 उचुडु-चुम्बुद् (उचुडु-चुम्बुडु)

ヒンディー語 चँचल बच्चों का अस्थिर होना, अस्थिर होना.

<意味> 我慢できない性格。短気。性急。

(例) *ne hon-aʔ ucuru-cumbud ka samuṛao-ta-n-a.*

(訳) この子どもの短気さはコントロールできない。

英語 impatience

43. ムンダ語 *uṭi-suṭi*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 उटि-सुटि

ヒンディー語 अँट-सँट, अनाप-सनाप बोलना. 2. कोई चीज खोना और उसे खोजना.
<意味>

1. あれやこれやと思いつくままに、言う。いろいろと質問する。

(例) *uṭi-suṭi-ta-n-em kaji-a-ñ-ta-n-a.*

(訳) あなたはあれやこれやと、私に言っている。

2. あちこちと探す。

(例) *uṭi-suṭi-ta-n-em dana-ta-n-a.*

(訳) あなたはあちこちと探している。

英語 to say somethings

44. ムンダ語 *uṭul-putul*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 उटुल्-पुटुल्

ヒンディー語 बोरे या कपड़े से दँके जनवर या बच्चे का हरकते करना.

<意味>

1. (マットや藁の下に隠れているものが動くことによって) マットや藁が揺れる。

(例) *busu²-re seta hon-e uṭul-putul-ta-n-a.*

(訳) 藁の中で、子犬がじゃれて、藁が揺れている。

2. (服などに虫が這っているので) 服をパタパタとさせる。

(例) *en hon do lija²-e uṭul-putul-ja-d-a.*

(訳) その子は服をパタパタと振っている (虫を追い出すために)。

英語 to shake a sheet

45. ムンダ語 *udul-dubul (udul-budul)*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 उडुल्-डुबुल् (उडुल्-बुडुल्)

ヒンディー語 पानी में डूबते-उतरते बहना, पानी में डुबना-उतरना.

<意味>水に浮かんだり、沈んだりする様子。プカプカ。

英語 coming up and sinking down in the stream of water.

46. ムンダ語 *udul-pudul*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 उडुल्-पुडुल्

ヒンディー語 दाल या गड़ुअ आदि पीट-पीट कर भूसा बना देना.

<意味> (シコクビエなどの雑穀を脱粒させるために、雑穀を束ねて地面に叩きつける際に、殻の破片が飛んでできる) 塵、あるいは塵の飛ぶ状況。

(例) *kode dal-dal-te goṭa bō²-ko-re ge udul-pudul-giri-aka-n-a.*

(訳) シコクビエを叩いて叩いて、(シコクビエの殻の破片が) あちこち頭に塵のようにたまってしまった。

英語 to make a dust

47. ムンダ語 *uduru-duguru*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 उडुडु-डुगुडु

ヒンディー語 हिचकोले खाता हुआ गाड़ी का चलना.

<意味>

1. (仕事などを) すばやくする様子。

(例) *uduru-duguru-ta-n-le kami-ke-d-a.*

(訳) われわれはすばやく仕事をした。

2. (車が) でこぼこ道を激しく揺れる様子。

(例) *gari uduru-duguru-ta-n sesen-a.*

(訳) 車がでこぼこ道を揺られながら進む。

英語 quickly, up and down

48. ムンダ語 *uræ-baræ*

ムンダ語デーヴァナーガリー表記 उरए-बरए

ヒンディー語 फूल ज्यादा.

<意味>花がいっぱいの様。

英語 flowers in dense clusters